

機関番号：18001

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2008～2010

課題番号：20402038

研究課題名（和文）2006 年クーデター以降の東北タイのプラチャーコム（住民組織）と市民社会形成

研究課題名（英文）Dynamics of prachakhom (village civil society) and civil society movement in Northeast Thailand after a coup d' etat in 2006

研究代表者

鈴木 規之 (SUZUKI NORIYUKI)

琉球大学・法文学部・教授

研究者番号：60253936

研究成果の概要（和文）：

本研究では、2006 年のクーデターによるタクシン政権の崩壊後のタイで市民社会化の動きがどの程度の可能性をもつものなのか、このようなプラチャーコム（住民組織）がどのように構築されるのか、メディアや教育はどのような役割を果たすのか、一方で上から形成されたプラチャーコムが多い中で草の根に住民のイニシアティブで構築するための条件は何かを実証的に明らかにした上で、プラチャーコムが市民社会形成の基盤になりうるのかをタイの研究者とともに実証的に明らかにする。また、クーデターが起こるようなタイ社会においてマクロレベルとミクロレベルで市民社会の動きがどのように接合するかも明らかにするとともに、さらにグローバル化の流れの中で国境をこえたプラチャーコムのネットワーキングについても調査を進めた。

研究成果の概要（英文）：

This is a result of the research on prachakhom (village civil society) as the basis for the emergence of civil society and development in Thailand's northeastern region.

In our past projects, we have discussed the possibilities of the formation of civil society movement in Thailand. We concluded that "Prachakhom" or village civil society was the foundation of the formation process, and, therefore, the approaches to foster Prachakhom were studied.

Prachakhom as a gathering of people has been an integral part of Civil Society Movement is a new idea, derived from the West. The principal focus of the civil society movement in Thailand, therefore, lies with the study of Prachakhom. Arguably, village civil society can be divided into two types: one is truly born out of the grassroots as expounded in the alternative development paradigm while the other arises in response to government policies. The research shows that the village civil societies which emerged during the implementation of Prime Minister Thaksin's projects, such as One Tambon One Product (OTOP) Project, the Village Fund, the establishment of Tambon Administrative Organization (TAO), were the second type of Prachakhom, which lacked the true participation of the people in the communities. Therefore, the research objective is to study the role of the media, network, educational institutions, factors and motives which engender the village civil society from the grassroots that will lead to the formation of civil society movement in the future. After Thaksin's banishment, our research has to adopted new direction of research.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合 計
2008 年度	4,000,000	1,200,000	5,200,000
2009 年度	4,100,000	1,230,000	5,330,000
2010 年度	4,600,000	1,380,000	5,980,000
年度			
年度			
総 計	12,700,000	3,810,000	16,510,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：東北タイ、市民社会、住民組織、プラチャーコム、2006 年クーデター、
ネットワーキング、メディア、教育

1. 研究開始当初の背景

本研究である平成 20 年度～22 年度文部科学省科学研究費基盤研究(B)海外「2006 年クーデター以降の東北タイのプラチャーコム（住民組織）と市民社会形成」は、平成 12 年度～14 年度文部科学省科学研究費基盤研究(B)(2)「東北タイの地域発展と市民社会形成」(研究代表者：櫻井義秀北海道大学助教授、研究成果は Sakurai Yoshihide and Somsak Srisontisuk(eds.) *Regional Development in Northeast Thailand and the Formation of Thai Civil Society*, Khon Kaen University Book Center, 2003 として出版)、平成 17 年度～19 年度文部科学省科学研究費基盤研究(B)海外「東北タイの開発と市民社会形成の基盤となるプラチャーコム(住民による小グループ)」(研究代表者：鈴木規之琉球大学教授、研究成果は Noriyuki Suzuki, Somsak Srisontisuk(eds.) *Civil Society Movement and Development in Northeast Thailand*, Khon Kean University Book Center, 2008, 392p. として出版)に続くものである。

2006 年に発刊された北川隆吉監修『地域研究の課題と方法—アジア・アフリカ社会研究入門—』(理論編〈山口博一・小倉充夫・田

卷松雄編著)、実証編〈北原淳・竹内隆夫・佐々木衛・高田洋子編著〉の 2 分冊。研究代表者の鈴木は理論編でアジアの市民社会化に言及)において、アジア・アフリカ地域の開発・発展とそれに伴う民主化、市民社会化の動きは重要な課題と位置づけられた。発刊にかかわる研究会や合評会においては各地域、各国別の差異に関心がもたれ、今後のさらなる個別実証研究の必要性が共通課題となった。

タイにおける開発・発展の研究は、かつては経済中心の開発か否かの対立した議論に終始したが、21 世紀に入った現在では民主化も含めた市民社会形成の流れのなかで議論されるようになってきた。タイにおける社会学者達の議論でも、開発を市民社会と結びつけた議論が中心となり、「社会開発の中で市民社会形成は可能か?」といった研究が数多く輩出されるようになってきた。

とりわけ、社会学の分野では、2000 年の第 1 回タイ全国社会学会での「市民社会とは何か?」というテーマ設定から 2003 年の第 2 回には「市民社会の形成はいかにして可能か」がテーマとなり、住民による小グループであるプラチャーコムが市民社会を成立さ

せるとの問題意識からプラチャーコム of 個別的な研究へとテーマ設定が動いてきた。

2006 年の第 3 回でも成功したプラチャーコムの事例がかなりとりあげられたが市民社会の可能性の議論までは至らなかった。

プラチャーコムは、もともとタイ語で人々の集まりを意味するが、市民社会を表すプラチャーサンコムが外来の概念としてタイ語に導入されたため、タイの文脈における市民社会形成研究のキーワードとなってきた。このプラチャーコムには、住民による草の根的なもの、政府の政策によって、上から形成を促されたものの 2 種類があり、とりわけ後者については 2006 年 9 月までのタクシン政権下での新たな地方行政の単位であるタムボン評議会の成立や百万バーツ基金、一村一品運動の浸透によって、住民の意識的なレディネスができないまま構築されたことが平成 12 年度～14 年度の櫻井義秀を研究代表者とするプロジェクトで明らかになった [Suzuki: 2003 in Sakurai and Somsak]。

2. 研究の目的

2006 年のクーデターによるタクシン政権の崩壊後は、住民の草の根的なプラチャーコム (小グループ) を形成した地域では動揺が少なく、主体性を今後もどの様に発展させていくかという流れが続いている。一方で上から形成されたプラチャーコムがほとんどである地域は、タクシン政権の崩壊とともにほぼプラチャーコムの活動は壊滅状態になり、次の政権が何を行うのか、もしくはタクシンの復活に期待するという状況となった。鈴木を研究代表者とする平成 17 年～19 年度の科研(B)海外のプロジェクトでは、ここまでの動きを明らかにした [Suzuki and Somsak : 2008]。

そこで、本研究では、現在のタイで市民社会化の動きがどの程度の可能性をもつもの

なのか、このようなプラチャーコムがどのように構築されるのか、メディアや教育はどのような役割を果たすのか、一方で上から形成されたプラチャーコムが多い中で草の根に住民のイニシアティブで構築するための条件は何かを実証的に明らかにした上で、プラチャーコムが市民社会形成の基盤になりうるのかを明らかにすることが目的である。

また、クーデターが起こるようなタイ社会においてマクロレベルとミクロレベルで市民社会の動きがどのように接合するかも明らかにするとともに、さらにグローバル化の流れの中で国境をこえたプラチャーコムのネットワークングについても調査を進めるものである。

開発と市民社会の研究はタイの社会科学研究者にも大きな関心を集め、潮流をリードする理論家であるティラユット・ブンミーの「市民社会とは何か」といった研究や、「市民社会はいかにして可能か」といったプラウエート・ワシーらの研究と、多くの社会学者によるプラチャーコムの研究が出版、発表されているが、この 2 つをつなぐ問題意識すなわち「市民社会はどのようなプラチャーコムが基盤となって形成されるか」という議論はいささか不足していると言わざるを得ない。また、グローバル化の中でのプラチャーコムのネットワークングや社会的資本 (Social Capital) についての研究も少ない。さらに市民社会の可能性についてはクーデターが起こるようなマクロレベルの問題もあってタイの研究者もあまり語りたがらない。2007 年 12 月には下院議員選挙があり、状況は大きく変わった。本研究は、その点を研究代表者や研究分担者、海外共同研究者たちの研究の調査、業績からつなげていくところに特色がある。そして、2006 年クーデター以降のグローバル化の中での東北タイでのプラチ

ヤーコム（住民組織）と市民社会形成を実証的に研究することに大きな意義がある。

3. 研究の方法

本研究チームは、琉球大学を中心とする日本側チームと学術交流協定締結校であるコンケン大学を中心とするタイ側カウンターパートによって構成されている。日本側チームは、鈴木規之(研究代表者)、櫻井義秀、佐藤康行、岩佐淳一、尾中文哉(研究分担者)の他に、若手研究者の泉経武、浦崎雅代を研究協力者として加えた。研究代表者と研究分担者は社会学を専門としている。

タイ側は、ソムサック・シーサンティスックを中心に、アヌチャー・ニンプラパン、プラチョン・キンミンヘー、チョイヨン・カムラット、スクムウィット・サイヤソープン、ワンナサックピチット・ブンサーム、ケラティポン・ジュターウィリヤで、いずれもプラチャーコムを基盤とした研究を行っている社会学や開発学などの専門家である。

研究経過は以下のとおりである。

2008年9月5日…コンケン大学において研究会

2008年10月20日…琉球大学法文学部附属アジア研究施設において国際小セミナー

2009年1月24～25日…日本女子大学において研究会

2009年9月24日…コンケン大学において国際小セミナー

2010年2月23～24日…琉球大学法文学部附属アジア研究施設において国際小セミナー

2010年9月8日…コンケン大学において国際小セミナー

2011年2月8～9日…日本女子大学において国際シンポジウム

4. 研究成果

以下は2011年2月8～9日、日本女子大学

において開催された国際シンポジウム“Networks of Civil Society Movement in Thailand”で研究成果として報告されたpaperである。

1. Transition and Reformation of Rural-Urban Relations in Thailand: From the Perspective of Social Exclusion and Inclusion

Prof. Dr. Sakurai Yoshihide

2. Development Strategy for Elderly Social Welfare Management in Nonesung Sub-District Muang District Udonthani Province, Thailand

Dr. Prachon Kingminghae

3. The Community Based Rehabilitation for Disabled People in Khon Kaen and Mahasarakham Provinces

Assist. Prof. Dr. Anuchar Ninprapan

4. Village Health Volunteer Activities in a Northeastern Thai Village: Consideration through Social Capital Theory

Prof. Dr. Yasuyuki Sato

5. The Development Model of People Network on Healthy Heart of Queen Sirikit Hearth Center in the Northeast of Thailand

Assist. Prof. Dr. Chaiyong Kamrat

6. The Process of Community Civil Society in Khum Community, Khu Muang Sub-district, Maha Chanachai District, Yasothon Province

Assoc. Prof. Dr. Somsak Srisontisuk

7. Community FM Radio Station in Thailand: The Gap between Civil Society and Commerce

Assoc. Prof. Jun'ichi Iwasa

8. The Alternative Approaches for Development of Bakhom Community, Mueng District, Khon Kaen Province,

Thailand

Assist.Prof.Dr. Sukhumvit Saiyasopon

9. Formation of “Prachakhom” toward Civil Society Movement in Northeast Thailand after Coup d'Etat in 2006

Prof.Dr.Noriyuki Suzuki

10. The Civil Society Movement for Sustainable Development of Silk Raisers Network in Northeast Thailand

Wannasakpijitr Boonserm

11. Healing Ritual of Thai-Kuy Villages in Lower Northeast Thailand

Dr. Wilat Phothisan

12. The Use of Local Knowledge in the Formation of Civil Society in Thailand

Dr. Keeratiporn Jutaviriya

13. Civil society, Thai Buddhism: a study of learning intimateness

Osamu Izumi

14. The Role of Monks in Hospice/Palliative Care Movement in Thailand

Masayo Urasaki

15. Civil Society Movement and a Change of Sociocultural Network : The case of N village, Ampoe Nongsonghong, Khonkaen Province

Prof. Dr. Fumiya Onaka

これらの paper は、2011 年度中に、コンケン大学より *Dynamics of prachakhom (village civil society) and civil society movement in Northeast Thailand after a coup d'etat in 2006* として出版される予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 7 件)

1. Sakurai Yoshihide “Geopolitical Mission Strategy: The Case of the Unification Church in Japan and

Korea” *Japanese Journal of Religious Studies*, 査読有り, vol. 37-2, 2010, pp. 317-334.

2. Yasuyuki Sato “Ethnicities in Transnationalized Thailand: Characteristics of the Thai-Khmer and the Thai-Kui” *Surindra Journal of People and Society in Local Culture*, 査読有り, vol. 1, 2009, pp.1-13.

3. Yoshihide Sakurai “Conflict Between Aum Critics and Human-Rights Advocates in Japan” *Cultic Studies Review*, 査読有り, vol. 7-3, 2009, pp.254-278.

4. Noriyuki Suzuki, Peeriya Wangpookakul “Japanization in the Globalized Age of Thailand” *Journal of Communication Arts*, 査読有り, Vol.27 No.3, 2009, pp. 156-170.

5. 鈴木 規之、ケラティポーン・スリタンヤラット「東北タイの開発と市民社会の基盤となるプラチャーコム(住民による小グループ)—2006年クーデター以降の農村のダイナミズム—」『アジア社会研究会年報』査読有り、第3号、2009年、pp. 13-37。

6. 櫻井義秀 「統一教会の研究(1) —入信・回心・脱会—」『北海道大学文学研究科紀要』査読無し、126巻、2008年、pp. 105-234。

7. 櫻井義秀 「若者とカルト—書き換えられる記憶のゆくえ」『現代のエスプリーカルト心理臨床の視点から』査読無し、490巻、2008年、pp.150-159。

[学会発表] (計 6 件)

1. 櫻井義秀、テーマセッション「現代タイの都市・農村関係」日本タイ学会、2010年7月3日、東京外国語大学。

2. Fumiya Onaka “A Network Analysis of Local Cultures in Two Thai Villages” Social Change and Cultural Transformation in

Globalizing Thailand, February 23rd 2010, University of the Ryukyus.

3. Noriyuki Suzuki“Japan in Regional Thailand” (招待講演), The 3rd Annual Conference of Japanese Studies Network – Thailand, October 15th 2009, Khonkaen University.

4. 鈴木規之、書評セッション「櫻井義秀著『東北タイの開発僧—宗教と社会貢献』」日本タイ学会大会、2008年7月6日、一橋大学。

5. Sakurai Yoshihide“Conversion as an Addiction to Relationships; the Setsuri Cult and Its Young and College-Student Followers” Annual Meeting of ICSA, June 27, 2008, Pennsylvania University, Philadelphia, USA.

6. 櫻井義秀「社会開発と宗教文化—東北タイの開発僧を事例として」北海道社会学会大会、2008年6月22日、旭川医科大学。

〔図書〕(計8件)

1. 鈴木規之・稲村務編著、彩流社『越境するタイ・ラオス・カンボジア・琉球』2011年、424頁。

2. 鈴木規之(編著)琉球大学法文学部『グローバル化の中でのタイ社会の変動と文化変容(琉球大学連携融合プログラム「人の移動と21世紀のグローバル社会」2009年度タイチーム報告書)』2010年、193頁。

3. 鈴木規之「周辺における内発的發展【沖縄と東南アジア(タイ)】」西川潤・松島泰勝・本浜秀彦編著、藤原書店『島嶼沖縄の内発的發展—経済・社会・文化』2010年、pp. 115-139。

4. 櫻井義秀・道長良子(編著)、梓出版社『現代タイの社会的排除』2010年、331頁。

5. 鈴木規之(編著)琉球大学法文学部『グローバル化の中でのタイ社会の変動と文化変容(琉球大学連携融合プログラム「人の移動と21世紀のグローバル社会」2008年度タ

イチーム報告書)』2009年、224頁。

6. 佐藤康行、めこん『タイ農村の村落形成と生活協同—新しいソーシャルキャピタル論の試み—』2009年、288頁。

7. 櫻井義秀編著、ミネルヴァ書房『カルトとスピリチュアリティ 現代日本における「救い」と「癒し」のゆくえ』2009年、294頁。

8. 櫻井義秀「現代の社会問題としてのカルト」日本脱カルト協会編、遠見書房『カルトからの脱会と回復のための手引き』2009年、pp. 191-197。

9. Noriyuki Suzuki, Somsak Srisontisuk(eds.) Khon Kean University Book Center, *Civil Society Movement and Development in Northeast Thailand*, 2008, 392p.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鈴木 規之 (SUZUKI NORIYUKI)

琉球大学・法文学部・教授

研究者番号：60253936

(2) 研究分担者

佐藤 康行 (SATO YASUYUKI)

新潟大学・人文社会・教育科学系・教授

研究者番号：40170790

櫻井 義秀 (SAKURAI YOSHIHIDE)

北海道大学・文学研究科・教授

研究者番号：50196135

岩佐 淳一 (IWASA JUN-ICHI)

茨城大学・教育学部・教授

研究者番号：10232646

尾中 文哉 (ONAKA FUMIYA)

日本女子大学・人間社会学部・教授

研究者番号：90233569

(3) 連携研究者

()

研究者番号：